

あとがき

本書を書き終えようとしている二〇二二年五月初めのこの時期、国防衛という強い意志のもと、ウクライナは、侵略を続けるロシア軍を押し返すべく善戦している。

自国の勝手な論理だけで現状を変更しようとし、実際に力に訴える国家がいること。様々なメディアで日々映し出される、残忍な侵略の実態。平然と使われる核の脅し。ウクライナ戦争の衝撃は、我々が理解していたはずの「現実」を、次々と打ち崩している。

本書で我々が目指したのは、米国や中国、豪州、ASEAN諸国が、どのようにウクライナ戦争の衝撃を理解し、対応しようとしているのか、そして、ロシアが侵略を続ける「論理」は何であるのか、これらを明らかにすることであった。各章の議論から浮かび上がるのは、ウクライナ戦争の衝撃を、異なる文脈の中でとらえる各国・地域諸国の姿である。

まず、軍事介入はしないという制限のもと、ウクライナに対する最大限の支援を国際社会と協力しながら継続する米国、力による現状変更がアジアに波及するリスクに警戒感を強め、米

国や欧州諸国と連携してウクライナへの強い支援を行う豪州である。

その一方には、ウクライナに強く執着するプーチン大統領の熱狂とそれに翻弄され続けるロシア、拡大するリスクを抱え込みながらもモスクワとの戦略的協力を進める中国がいる。

そして、力による一方的な現状変更に危機感を募らせながらも、ロシアの存在感を無視できないASEAN諸国である。

ウクライナ戦争が動いている最中での分析であるうえ、考察できなかった主要関係国もある。当然ながら、本書が、この戦争が変えた世界全てを描ききれているわけではない。

ウクライナ戦争がどのようなかたちで終結を迎え、戦後復興に向けてどのような取り組みがなされるのか。欧州の安全保障が、どのような枠組みで再構築されるのか。そして、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序を、世界は維持することができるのか。

我々が考え続けなければならない課題は多い。何よりも、今後現実をしっかりと見据え、各国の動きを丁寧記録し、国際秩序に与える影響を真摯に考え続けることが大切であろう。

本書が、ウクライナ戦争に対する関係国の対応やその背景にある文脈についての理解、この

戦争が国際秩序に与える影響をめぐる議論に少しでも寄与できたとすれば、執筆・編集チーム一同、望外の喜びである。

新垣拓